

甦れ!!魚たち

—紫川再生の経験をフィリピンに移転した—

紫川を愛する会

1 はじめに

紫川を愛する会は、平成元年(1989年)3月25日に設立された北九州市を拠点とする環境ボランティア団体であり、「紫川にアユを呼び戻そう」をモットーに4人の市民による紫川のゴミ清掃活動からスタートしました。

会員数は、平成23年4月1日では、50名であり、退職者、公務員、会社員、主婦等が主な会員です。その中で、会長1名、副会長2名、世話人7名(この中に会計、会計監査員等が含まれる)の役員で世話人会を構成し、毎年4月に開催する総会においてその年度の実施事業を決定します。

2 当会の主な事業内容

当会の主な事業内容は、以下のとおりです。

①紫川クリーンアップ大作戦：紫川のゴミ清掃は、当会の活動の原点です。平成元年3月に設立されて以来、この活動を毎月1回、20余年にわたり継続しています。



収集された放置ゴミ

②アユの放流祭：アユは、水質の汚濁に敏感であり、澄んできれいな清流でしか生息できません。

戦後の経済の高度成長期は、家庭排水や工場廃水が処理されないまま排出されていたので、川は汚染され、鮎は見られませんでした。

しかし、1970年代、北九州市の紫川においては、厳しい水質環境基準の設定、下水道施設の普及、川沿いの不法住宅の撤去などにより、紫川の水質は急速に改善され、アユ等の魚が戻ってきました。

1980年代後半には、BOD(生物化学的酸素要求量)値は2ppm以下にまで減少しました。そこで、当会の橋本副会長の提案により「アユの放流実験」が計画されました。

即ち、アユを保護するために、1989年に市民と行政が一体となって、稚アユの放流を開始しました。その結果、紫川は、アユが生息できる清流に回復したことが生物学的にも確認されました。

それ以来、毎年、4月下旬に、清掃活動した後、10,000匹あまりのアユを放流し、紫川の自然環境及び資産の保護を推進しています。



地域住民によるアユの放流

③紫川の生物調査：河川の水質を判断するために、そこに生息する指標生物を調べることににより、きれい、やや汚い、汚いなどに判定する生物学的手法があります。

この方法は、COD(化学的酸素要求量)などの化学薬品や分析機器などを使用する試験と違って、魚獲りネット、顕微鏡(拡大鏡でもよい)などがあれば、簡単に行うことが出来る利点があります。

当会では、平成5年(1993年)から、「紫川秘密探

検隊」と称して、小学生やその父兄などを紫川に招待して、紫川の自然環境に触れる中で、この手法を利用した生物調査の実習を行っています。

④紫川ハゼ釣り大会：平成5年(1993年)以来、毎年、10月の下旬に紫川下流域で、市民ハゼ釣り大会を開催します。紫川がきれいになり、魚が戻ってきて、当会のモットーのひとつである「紫川を食べよう」という誰でも理解できる趣旨で紫川の浄化の歴史や環境ボランティア活動について市民にアピールするイベントです。

平成20年(2008)11月1日のハゼ釣り大会は地元市民に加えて、隅田川(東京都)、堀川(名古屋市)、四万十川(四万十市)等の国内の河川保護団体を始めとし、海外から、JICA(国際協力機構)研修員、フィリピンからマンダウエ市長やPCAPI-7(Pollution Control Association of the Philippines Inc. Region-7：フィリピン公害防止管理者協会・第7管区)、CLEAR(Citizens' League for Ecological Awareness and Responsibility：環境意識を向上させるための市民連合)等の環境ボランティア団体を招待し、盛大な国際イベントになりました。

当日は、好天に恵まれ、500名余りの多くの参加者がありました。その中に混じって、上記の国内外の参加者もハゼ釣り、アユの塩焼き、ハゼの立田揚げを堪能しました。

文字通り、北九州市に青い空やきれいな紫川がよみがえり、そこで獲れた魚を食べることで、紫川の自然の恩恵・資産を実感する事ができました。

北九州市の紫川再生の経験を教訓にして、河川の再生・保全活動を実行し、開発途上国の川に魚が戻って来てもらいたい思いで一杯です。



ハゼ釣り大会スナップ

⑤国内外の環境ボランティア団体との交流：当会は、設立以来、隅田川(東京都)、堀川(名古屋市)などの日本の各地で活動する環境保護団体と交流し、河川の自然保護や環境改善などについてシンポジウムを開催するなどして意見交換を行ってきました。

近年は、市内の堀川(八幡西区)、遠賀川(福岡県)に加えて、市外の筑後川(山と川と海を語ろう会)の河川保護団体とも交流活動を拡大しています。

一方では、海外の環境ボランティア団体とも交流し、1994年からインドネシア国のスマラン市に拠点を置く環境保護団体(BINTARI財団)との河川環境再生活動を始め、1998年には、フィリピン国のメトロ・セブにおいて、環境ボランティア団体(PCAPI-7, CLEAR, 等)と協働しグアダルペ及びブツアノン川の河川浄化や環境意識向上に関する市民啓発活動を行ってきました。

⑥JICA国際研修による開発途上国の研修員の受け入れ：平成13年(2001年)、初めてJICA国際研修「産業環境対策コース」の研修員6名を紫川に招待し、「市民による環境保全活動の1事例」として、当会の活動内容について、紹介しました。

それ以来、平成23年(2011年)3月まで、61カ国、400余人の研修員を受け入れています。

研修では、紫川の水質とアユの歴史や当会の活動概要について講義を行うとともに、実際に紫川に出て、ゴミ清掃活動や川の生物調査をします。

JICAでの座学が多い研修内容と違って、現場に出での視察や体験実習は紫川のすがすがしい自然環境に触れるたり、地域住民と交流することで研修員には大変いい息抜きになっているようです。

清掃作業終了後、彼らに感想を聞いてみると、口を合わせたように「素晴らしいボランティア活動だ。



ゴミ清掃終了後は研修員と記念撮影

他の研修員にも体験してもらいたい」「ボランティアで一般市民が清掃活動に参加するなんて、私の国では考えられない」「川は、神からのいただき物、大切に保護して行かなければならない」「自国に帰ったら、私も地域の川をきれいにしたい」等、賛辞の言葉を惜しみません。

研修員は、自国では、かなり高位の行政官や企業における管理者であり、ゴミ収集など初めて経験する人達ばかりです。

また、研修期間中には、機会に合わせて、紫川ハゼつり大会や環境保護シンポジウム等に参加していただき、環境保全に関する意見交換の場をもっています。

例えば、国際版の紫川秘密探検隊「A study tour in the Murasaki River」と称して、紫川における清掃活動、生物調査、ハゼ釣り大会等への参加をパッケージにして、研修員に提供しています。

3 水環境改善に関する技術移転の目的

フィリピンのメトロ・セブ地域には、ブツアノン川などの大きな河川が街の中心部を流れているが、近年、産業開発や都市化及び人口増加が進行し、かつては魚が棲んでいた川は、ゴミが散乱し、黒い川となり、その面影はまったく見られず、早急な改善を必要としています。

北九州市を流れる紫川は、1950年代以降、急速な経済発展に伴う工場からの産業廃水や生活排水の垂れ流しにより生物の生息しない「死の川」同様でした。しかし、1970年代に入り、法規制・下水道施設の整備や市民の水環境改善活動等により、かつてのアユの棲む清流に再生しました。

当会は、市民による環境保全活動の中で、紫川が再生した際に蓄積された技術などのノウハウや経験を保有しており、メトロ・セブ地域の環境ボランティア団体、行政機関等にこれらの技術やシステムを移転し、地域河川の水質浄化・自然保護に寄与する目的で協働しているものです。

4 技術移転の内容

当会は、まず、平成10年(1998年)から現地のボランティア団体と協働して、河川のゴミ清掃などの河川保全活動を開始しました。

それ以後、ほぼ毎年のようにメトロ・セブを訪問し、現地の関係者と会合を持ち、ごみ収集活動、生物調査、植林活動など河川改善活動を行うとともに、セブ市を流れるグアダルペ川に建設中であった浄化槽の維持管理について助言を行いました。

又、平成17年(2005年)7月には、水環境改善に関する啓発セミナーを開催し、ゴミのポイ捨て禁止など地域住民の環境保全意識を向上させました。

一方、平成20年(2008年)11月、紫川において、国内外のボランティア団体を招待し、水環境保全におけるボランティア団体の役割などに関する討議を行い、「アジア水の輪ネットワーク」を構築し、ボランティア団体間の協働作業により地域の水環境の改善に努めることを決定しました。

主な活動内容の詳細は以下のとおりです。

①メトロ・セブ地域の河川浄化のための現地ボランティア団体等との協働活動

○平成10年(1998年)11月：

当会の会員が(財)北九州国際技術協力協会がセブ市で開催した「市民・NGO環境セミナー」に参加したことから、現地環境ボランティア組織である(1)PCAPI-7、(2)CLEAR等との交流が始まり、以後、水環境モニタリング技術や市民参加による環境改善活動に関する協働作業を開始しました。

○平成17年(2005年)7月：

当会は、メトロ・セブ地域において、PCAPI-7、CLEAR等のボランティア団体により実施されていたブツアノン川の水質改善活動を支援するため「河川の生物調査」等の水質モニタリング調査を実施するとともに、環境NGOや地域住民を対象とした市民参加による水環境改善手法をテーマに第1回環境保全シンポジウムを開催しました。

それ以後、2010年まで、毎年8月、メトロ・セブ地域を訪問し、水質モニタリング技術指導や実践活動、市民の環境に対する意識向上のノウハウ等についてミニセミナーを開催し、提言・指導を行ってきました。

その結果、ブツアノン川でセラピア等の魚釣りが楽しめるようになりました。



ブツアノン川での魚釣り



ブツアノン川での生物調査

②紫川再生の歴史に関する講義及び「Murasaki River Study Tour」の実施

○平成11年(1999年)10月：

当会は、北九州市で開催された「市民・NGO環境セミナー」に参加し、メトロ・セブから参加したPCAPI-7及びCLEARの代表者と再会し、紫川の水質の歴史や当会の活動を紹介するとともに、紫川の自然環境を視察し、ゴミ清掃活動を実践しました(Murasaki River Study Tour)。

以後、フィリピンからの環境ボランティア団体、行政官、大学関係者等に対して、当会による様々な水環境改善・保全活動を通して積み重ねてきた知識・経験を紹介し、紫川河川敷にて、生物調査や清掃活動を体験してもらい、ブツアノン川において同様の活動を地域住民と共に実践しています。



国際環境保護シンポジウムの開催

平成20年(2008年)11月に、当会発足20周年記念の国際環境保護シンポジウムを開催し、国内のみならず、フィリピンのメトロ・セブ地域の環境ボランティア団体(CLEAR及びPCAPI-7)、マンダウエ市長夫妻を招待し、地域の水環境改善・水資源保護を目的に環境NGO間で協働して推進するための「アジア水の輪ネットワーク」を構築し、地域の環境改善のために環境NGOが情報を共有・協働して活動することを決定しました。

○平成21年(2009年)8月：

メトロ・セブのマンダウエ市長の招待により、マンダウエ市制移行の40周年記念事業として、北九州市との友好記念植樹事業、及び前年に結成された「アジア水の輪ネットワーク」の第2回環境シンポジウム等に参加し、ネットワークの下での環境ボランティア団体間の協働活動のテーマなどについて協議しました。

5 活動の成果・波及効果

フィリピン等の開発途上国は、急速な経済発展、人口増加などにより、生活排水や産業廃水等による水環境の悪化が進行しているが、その対応策が遅々として進まず、深刻な悩みとなり、早急な解決が望まれています。

これら水環境改善に関して、途上国への技術的・財政的な支援は、ODA(政府開発援助)等により実施されているが、国レベルでの案件が多く、地方レベルにまでは支援が充分行き届いていません。

日本には、かつての水質汚濁などの公害問題を解決した多くの経験があり、特に北九州市などの地方の市民団体や行政機関にそれらのノウハウ・経験が蓄積されています。

特に、当会は草の根レベルの市民参加により水環境を改善・保全してきた様々な成功事例を保有しており、これらの経験を開発途上国に移転し、現地の水環境の改善を図ることは、緊急かつ必要なことであり、国際貢献の観点からも意義深いことです。

紫川を愛する会は、20年にわたる水環境保全活動のなかで、最近の10余年間、フィリピン等の開発途上国に、当会が蓄積してきた水環境・資源に関する知識や経験を移転してきました。

これらの取り組みは、地方の小さな草の根レベルの環境ボランティア活動が、地球規模の水環境問題の解決に少しでも貢献できたことを示すものです。

現在、環境問題の解決には、市民参加が必須なものであり、中でも、環境NGOの果たすべき役割は重要な地位を占めるようになりました。当会の活動は、「Think globally, act locally」の理念を実践したものであり、市民参加による環境保護活動のモデルケースになるのではと思います。

また、これらの活動の中で、国際研修に貢献していたことでJICA九州センターから感謝状を贈呈されるなど、北九州市が進める「環境モデル都市」の実践に向け、微力ながら寄与してきたと考えます。

6 活動の今後の計画

今後とも、メトロ・セブ地域の水環境や水資源を改善し保全していくために、以下の活動を継続して実施する予定です。

①メトロ・セブ地域の環境NGO等との現地河川浄化・資源保護のための協働活動

ゴミ清掃活動、水質モニタリング調査、環境保全活動に係わる指導者の育成活動など

②紫川再生の歴史に関する講義及び「Murasaki River Study Tour」の実施

メトロ・セブ地域関係者への研修、北九州市における成功事例の習得及び実践など

なお、これらの活動について、ニュースレターの発行、環境保全シンポジウム等へ参加し、それら成果を書籍にし、発刊する等、同様の活動を行っている国内外の環境保護団体などの一助としています。

今後は、マレーシア等の東南アジアの他の環境ボランティア団体等との交流を広め現地河川の水質改善のための協働活動を計画しています。

紫川を愛する会・世話人 森下 正人